小峰城よもやま話

第十二話 江戸時代の石垣修復

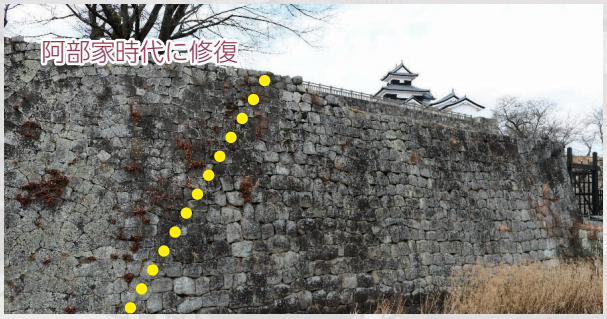
10年前の平成23年3月11日に起きた東日本大震災では、小峰城の石垣も大きな被害を受けました。10か所にわたって崩落した石垣の修復は、8年後の平成31年3月に完了しました。

江戸時代の小峰城でも、地震などの災害で石垣は幾度も崩れていたようです。城は藩主や家臣の住居であり職場でしたから、都度修復が行われました。

白河藩主阿部家の史料によれば、文政6年（1823）以降、阿部家が白河藩主を務めた44年間のうち、少なくとも5回城を修復しており、そのうち3回に石垣の修復が含まれています。

例えば、天保10年（1839）には、三重櫓、多聞櫓、竹之丸南側、清水門西側などの石垣で崩落の被害があり、同時に多くの建物も被害を受けています。おそらく、台風などの大規模な災害が起きたのでしょう。現在の清水門西側の石垣は、このとき積みなおされたと考えられています。写真を見ると、向かって右側は石と石の隙間が多い積み方ですが、左側は隙間なく石が積みあげられており、こちらが天保10年に積み直された部分と考えられます。このように時代ごとに修復を行ったことで、城にはさまざまな積み方の石垣が共存しています。

また、藩主は城の修理をする際に、幕府に絵図と願書を提出し、許可を得る必要がありました。願い出てもすぐに許可されるわけではなく、担当の役人や老中の手で何度か添削・修正され、ようやく正式に受理されます。さらに、天保10年の修復の際は、工費の調達のため、藩領内の村々にも規模に応じた額を負担させました。このように、江戸時代でもさまざまな苦労を伴いながら、石垣は維持されてきたのです。



▲清水門西側の石垣
（点線より左が天保10年に修復されたと考えられる部分）

問文化財課☎㉗2310

渋沢栄一×松平定信 南湖を彩る系譜

第三回 渋沢栄一の生い立ちから青年期

渋沢栄一は、天保11年（1840）武蔵国榛沢郡血洗島（現・埼玉県深谷市）で生まれました。生家は藍玉の製造販売を営む裕福な農家でした。父親の市郎右衛門は教育熱心で、栄一が6歳の頃から漢文の手ほどきをし、7歳になると、栄一の従兄弟である漢学者・尾高惇忠のもとに通わせて、四書五経などを習わせました。

幼い頃から学問に励んだ栄一は、貨幣経済の発達した土地で家業の手伝いをしながら商才を磨いていきます。これが後に栄一を経済人として大きく成長させるもとになります。

栄一はやがて一橋家の徳川慶喜に仕えます。その頃パリで万国博覧会が開催され、将軍の名代として慶喜の弟である水戸家の徳川昭武のフランス派遣が決まると、栄一も随行員として渡仏を命じられます。これが栄一の人生の一大転機となりました。

栄一は渡仏後、昭武とともにヨーロッパ諸国を視察し、近代化された社会・文明に驚かされます。フランス経済の仕組み、特に銀行制度や資本主義制度に興味を示し、それらを学んで帰国します。

その後、栄一は明治政府に出仕し、大蔵省の役人となります。そこでは、貨幣制度の改革、度量衡の統一、租税制度の改正、郵便制度の確立、鉄道の敷設、官庁建設など、数多くの重要な政策に関わりました。

ところが大蔵卿の大久保利通と対立し、大蔵省を去ります。民間人となった栄一は、日本で初めての銀行である第一国立銀行（現・みずほ銀行）を設立して頭取となり、その後、約500の企業創立に関わっていくことになります。

▲大蔵省出仕時代の栄一
（渋沢史料館所蔵）

▲中の家全景
（渋沢史料館所蔵）

（文・中山義秀記念文学館　館長　植村美洋）